

# ハンガリーで日本語とモンゴル語を教授

## 外山高一の活動

小川 誉子美

### 1. はじめに

ヨーロッパの日本語講座には、草創期から日本語母語話者が教壇に立ってきた。外山高一もその一人である。筆者は、ヘルシンキ大学のラムステッド文庫の書簡からはじめて外山の名前を知った。外山については、ハンガリーとの接点をはじめ、渡航の経緯や教育内容、海外での活動について不明な点が多い。

フィンランドで初めて日本語を教えた G. J. ラムステッド (1873~1950) は、アルタイ言語学の権威として知られる言語学者であるが、初代フィンランド公使 (1919~29) として日本に滞在し、多くの日本人と交流をもった。ヘルシンキ大学のラムステッド文庫には、日本をはじめ各地の学者との交流を物語る書簡が所蔵されている。本稿は、その一人である外山高一について紹介する。外山高一 (1882-1969) は、戦間期の一時期ウィーンに留学していたことが知られ、また、スキーや水泳などスポーツに秀でそれに関する著書がある。高一の父、外山正一 (1848-1900) は、幕末および明治期に、留学生としてイギリスやアメリカに学び、東京帝国大学文学部長、総長、文部大臣をつとめた人物である。また、新体詩の発表やローマ字運動など、国語・国字改良運動を牽引し『英語教育法』(1897)を刊行するなど新時代の知識人としての活躍も知られている。そうした家庭で幼少期を過ごした外山高一の渡欧までの活動や言語への関心について、国内外の資料をもとに紹介したい。

### 2. 外務省囑託とドイツ語

外山は、東京外国語学校ドイツ語科を卒業し、

その16年後にヨーロッパへ留学、帰国後は東京芸術学校等でドイツ語教師を務めている。堪能なドイツ語を生かし海外の学者と接点を持ち、海外任務を命ぜられたこともあった。それを示す資料に、ラムステッド宛書簡がある。

ラムステッドは滞日10年の間に日本語や朝鮮語を身に付けたが、それ以前から多くの言語を駆使できたので、彼宛の書簡や送り状はさまざまな言語で書かれている。言語学者の泉井久之助はフランス語や英語やドイツ語など複数の言語で、エスペ란ティストの何盛三はエスペラント語で、モンゴル語学者の精松源一はモンゴル語で書簡をしたため、外山高一は常にドイツ語を用いている。

次に、海外活動に関する資料である。第一次世界大戦後のパリ講和会議に関連し、外務省囑託に複数回任命されている。外務省人事課から在仏日本大使宛電信記録

(1921年2月28日付外交史料館所蔵)には、外山宛の辞令交付の依頼があるが、外山は「元囑託」と記されている【画像1】。さらに、パリ平和条約に関連し、賞与の対象者として、陸・海軍の大佐らとともに外山の名前が記されているが、具体的な任務は記されていない。外山がトリアノン条約に関わったのだろうか。任務内容に関する記録は確認できない。

### 3. ヨーロッパで日本語を教える

「思いだすままに：言語学の先生への質問 外山高一の父 外山正一」の中で、著者の佐藤良雄は、水泳の仲間である高一を神伝流水泳術の大家で馬術も得意であり体も巨大であったと紹介し、オーストリアに留学した経緯については「あそこに正しいドイツ語が話されていたからだという。父君のえらばれた留学先であろう」と記している。しかし、ウィーン大学に留学する前にブタペストの大学で、日本語を教えていたという記録がある。

その一つ目は「日本語に結ばれた可憐な異国ローマンス、まだ見ぬ国へよせる思慕の念ひに、蜜月旅行はきつと日本」（朝日新聞 1927 年 3 月 18 日朝刊）と題する記事である。この記事では、若いハンガリー人男女二人の日本語による自筆書簡を紹介しているが、彼らの日本語学習の経緯については次のように記している。母国の将来を憂慮していた折、ツラニズム運動（後述）がおこっていたところに、極東の小国日本の海軍に興味があったことから、同じ大学に留学していた元文部大臣外山正一氏の子息、文学士外山高一君に日本語を習い始め、1923 年に外山が帰国した後は、外務省から出向している中野国利について習い、朝日新聞の論説も読めるようになったと記している。

1920 年代初めに外山がハンガリーで日本語を教えていたことが確認できる二つ目の資料は、ウィーン大学古文書館が所蔵する人事記録である。それには、外山は 1921 年～23 年の間ブタペストのパズマニ・ペーテル大学(Pasmani Peter 現 ELTE 大学)で、日本語やモンゴル語や比較言語学を教えたこと、ウィーン大学で 1924 年に日本語講座を担当、さらに、モンゴル語やアルタイ言語学を教えることも希望したが、実現しなかった旨が記されている。今から 100 年前のことである。離任の経緯については記載がないが、前述の 1921 年の外務省資料にある外務省嘱託としての職務が、

ブタペストやウィーンでの日本語教育とどのように繋がったのかについては、不明である。

### 4. モンゴル語への関心

外山高一がブタペストでモンゴル語を教え、ウィーンでもモンゴル語教授を願い出ているという記録に関連し、彼のモンゴル語研究についてたどってみたい。

『東京外国語学校史』（2008）の「蒙古語学科の誕生と発展」によれば、外山は 1905 年に東京外国語学校のドイツ語学科を卒業したのち、選科生としてモンゴル語を学んだ。また、1918 年、翌 19 年には、外モンゴルを旅行し、帰国後の報告では、フレー（現ウランバートル）で話されているモンゴル語の習得を勧めている。特に注目すべきは、日本ではじめてのモンゴル語辞典の編集に関わったことである。1917 年、「蒙古研究会」の名で謄写版の『蒙和辞典』（藤岡勝二監修、文信社）が出版された。編者として名前を連ねているのは六名で、その中心となったのが蒙古研究会幹事をつとめていた外山高一であったという。

外山が辞典の編纂に関わり（1917 年）、外モンゴルを旅行（1918・19 年）した翌年、1920 年 2 月にアルタイ言語学の権威 G. J. ラムステッドがフィンランド初代公使として東京に着任した。フィンランドは、ウラル語・アルタイ語研究においてすでに先駆的な研究を残していた。フィンランド語は、ハンガリー語と同様に、非印欧語族系の言語であり、フィンランドの言語学者カストレンらは、自分たちの祖先はどこから来たのかという問いに答えるべく、シベリアやバイカル湖まで学術調査を行い、言語学的、民族学的資料を広範囲に収集し多くの成果を発表していた。ラムステッドはこれを引き継ぎ、アフガニスタンから中央アジア、モンゴルにかけて七回におよぶ学術調査を行い、すでにその学術成果は知られていた。モンゴル語に通じ、アルタイ言語学者として世界的な名声を得ていたラムステッドが

来日したことは、言語学者や民族学者にとって、大きな刺激となったに違いない。ラムステッドの来日後間もないころ、外山はラムステッドに帝国大学への来訪を願う書簡（1920年5月28日付東京）を送っている。それは、帝国大学言語学部教授の藤岡勝二が現在ウラル・アルタイ言語学とモンゴル語を教えている、ラムステッドとの面会を希望していること、また、数年後、新たに教授を雇用する計画があることなどを伝え、ラムステッドに藤岡のセミナーへの参加を促し、約束を取り付ける内容である。

一方、清国の一部であった外モンゴルは、1911年に独立宣言し、モンゴル人の新国家が成立した。東京外国語学校に蒙古語学科が正式に誕生したのも、新モンゴルが成立した1911年であった。

こうした情勢の中、外山がハンガリーに渡る前に、藤岡勝二監修のもとモンゴル語辞書の編纂を手掛け、当時としては珍しい外モンゴルへの旅行を経験し、モンゴル語に精通したラムステッドの知己を得たことは、彼の比較言語学への関心を一層深めたに違いない。ヨーロッパでも学术交流を行い機会があれば講じたいと考えるのは、39歳の外山にとって自然なことであったと思われる。

## 5. 国内外の系統論

言語の系統を明らかにする系統論は、日本でも大きな関心が注がれていた。東京帝国大学の教授上田万年、前述の藤岡勝二はともにドイツ留学の経験があり、上田は、1890年から94年まで東洋の言語に精通したライプチヒ大学のフォン・デル・ガーベレンツの講義を受け、藤岡も1901年から1905年までドイツで最新の言語学理論に出会い、比較言語学の手法を身に付けた。一方、日本語の系統についても国内外で盛んな議論が行われていた。外山が渡欧する前の状況について、小川（2014）を転載しながら紹介する。

19世紀のヨーロッパで比較言語学の手法が確立して以来、いわゆる印欧語間では親族関係が証明されていった。日本語に関しては、ユリウス・クラプロートを皮切りに、19世紀のウィーンでは、ボラー（A. Boller）の「日本語がウラル・アルタイ系に属することを証明する」（1857）、ブタペストのプレーレ（W. Pröhle）による

「日本語をウラル諸語、アルタイ諸語と比較する研究」、ウインクラー（H. Winkler）の「日本人とアルタイ人」（1894）、「ウラル・アルタイ語族、フィンランド語と日本語」（1909）などがある。国内では、藤岡勝二がアルタイ語との関連で日本語の系統について「日本語の地位」（1908）を発表した。ドイツに留学し、ウインクラーとも交流のあった藤岡は、この論文の中で、ウラル・アルタイ語との親族関係を決定する、印欧語とは異なる言語的特徴を14項目上げ、日本語は、母音調和の現象をのぞく13項目を満たすとした。

朝鮮語との比較を通じて、類似性に関する議論もあった。東洋史学者の白鳥庫吉（東京帝国大学）は、「日本書紀に見えたる韓語の解釈」（1897）で、日本書紀に現れることばの朝鮮語による解釈を試み、両言語の類似性を明らかにしようとした。その後、1901年から2年間欧州各地を歴訪、帰国後、日本語の比較研究の範囲を拡大し、「国語と外国語との比較研究」（1905）を著した。その中で、ウラル・アルタイ諸言語から南洋語にいたる60余りの言語と比較し、日本語の語源解明を試みた結果、両言語が親密な関係にあるということを宣言した。しかし、1914年には、「朝鮮語とUral Altai語との比較研究」において、朝鮮語はウラル・アルタイ語に属するということは疑いの余地がないとしつつも、日朝両言語に類似した単語が少なく、類似していると以前指摘した単語も、その内容は証明に至るものではないと以前の宣言を撤回した。白鳥は、欧州滞在中ハンガリーを訪問し、前述のトルコ語学者プレーレの知

己を得、1902年にはハンガリー民族誌協会に論文を発表している。彼は、当地で東洋語、東洋民族の研究が盛んである様子を日本にも伝えている。

アルタイ言語学研究が活気にあふれ、内外の学者たちの注目を集める中、外山高一はヨーロッパに旅立ったのである。

## 6. ツラニズム運動と1920年代のハンガリー

ハンガリーでは、19世紀から、ツラニズム運動（インド・ヨーロッパ語族に含まれない、日本人、及び、フィンランド人、ハンガリー人、トルコ人などユーラシア大陸に居住する諸民族の連帯を呼びかけた思想・文化運動）が高揚し、東洋の言語や民族に関する研究が盛んに行われていた。特に、日露戦争後のハンガリーでは、日本語の教科書『日本語文法（実用的日本語－ハンガリー語－ドイツ語会話、7種類の日本語文字一覧付き）』（1905）が出版され、『大日本』（1906）など日本に関する記事や書物の刊行が相次いだ。日露戦争における日本の勝利が熱狂的に歓迎され、日本に関する出版物が急増するという現象は、ロシアや西洋列強の支配下にある被抑圧地域にしばしば見られた。しかし、日露戦争直後に日本語の教科書まで出版されるようになったのは、おそらくハンガリー以外にはないだろう。

前述の『大日本』の著者バラートシ・パログ・ベネディクがツラニズム運動普及のため来日し、彼の通訳をつとめた今岡十一郎（東京外国語学校ドイツ語科卒）が、1922年にブタペストに渡った。彼は、1931年に帰国するまでツラン団体で日本語を教え、多数の記事や講演で日本を紹介した。前述の日本語のアルタイ説を唱えた言語学者のプレーレが1924年に教授に任命された。このようにツラニズム運動や系統論が興隆を極める1920年代は、ハンガリーが1920年のトリアノン条約により領土の三分の二を失った直後の混乱の時代でもあった。

その最中の1921年に教壇に立った外山は、当時のハンガリーで日本語やモンゴル語を教える自身の活動の意義をどう捉えていたのだろうか。プレーレやバラートシらハンガリー側は外山をどのように迎えたのだろうか、想像は膨らむが、資料が確認できず推測の域をでない。

## 7. おわりに

最後に、帰国後の外山の関心を垣間見ることのできる書簡を紹介しよう。これは、外山が東京からヘルシンキに一時帰国中のラムステッドに宛てたものである（1926年8月28日付）【画像2】。フィンランド語研究のために、フィンランド語史、フィンランド語語源学、小学生用読本の最新版、フィンランド語音声図、フィンランド語純化運動等に関する資料を送ってほしいという内容である。

その後、外山がフィンランド語に関する知識を得たのであれば、当時展開されていた系統論をどのように見ていたのだろうか。残念ながら、外山のこの分野に関する論文は見当たらない。モンゴル語辞典を編纂し、外モンゴルに足を踏み入れ、ヨーロッパで日本語やモンゴル語を教えたという日本人はおそらく彼をおいて他にはいないだろう。ラムステッドが1938年にヘルシンキ大学で講じた日本語は、当時の講義ノートによれば、語彙を形態素に分け語源についても詳しく説明していた。外山がブタペストやウィーンで講じた日本語は、モンゴル語やハンガリー語との類似性についてどのように説明していたのだろうか。

父正一は国字ローマ字化運動に深く関わっていたが、高一の立場は確認できない。外山のパリ講和会議での任務をはじめ、ヨーロッパでの学者たちとの交流やハンガリーでの教授内容を明らかにするには、さらなる資料の渉猟が必要である。

（横浜国立大学教授・博士〈政策・メディア〉）

## 参考文献

- 小川 誉子美 (2001) 「ラムステッドと日本語研究」『広島大学留学生センター紀要』11号
- 小川 誉子美 (2009) 「黎明期の日本語教授者をめぐってー脇水鉄五郎とハンガリーの関わりー」『ユーラシアの再発見』
- 小川 誉子美 (2010) 『欧州における日本語講座ー実態と背景ー』風間書房
- 小川 誉子美 (2014) 「ラムステッドと日本語学者たちーフィンランド側の資料をもとにー」『ユーラシア都市文化叢書2 沿バルト海の都市ーヘルシンキ、サンクト・ペテルブルグ、ベルリンー』
- 佐藤良雄 (2001) 「思いだすままに (163) 言語学の先生への質問 外山高一の父 外山正一」『日本古書通信』66 (8) 日本古書通信社
- 野中正孝 (編著) (2008) 『東京外国語学校史』不二出版
- 服部四郎 (1959) 『日本語の系統』岩波書店

TOYAMA KŌICHI  
NIPPON TOKYO-SH  
USAGOME-KU, TEL. 03-5641-1111  
20-BANKA

Tokyo, den 28. August 1926

Hochachtungsvoll Herr Professor!

Schon lange habe ich nichts von Ihnen gehört. Wie geht es Ihnen und Ihren Familiengliedern? Wenn werden Sie wieder nach Japan zurückfahren? Es ist dieses Sommers in Japan schrecklich heiss. Ich bin teils in Tokyo teils in Kamakura.

Ich möchte einige finnische Bücher für Sprachforschung kaufen. Wenn ich Sie bitten darf, möchte ich Sie bitten, die folgenden Bücher in der Gelegenheit mirgütigst senden zu wollen.

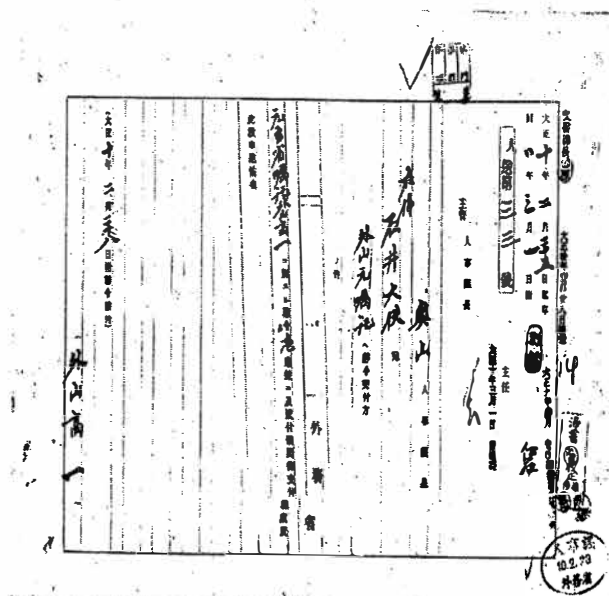
1. Die Entwicklungsgeschichte finnische Sprache.
2. Kurzgefasste finnische Grammatik (die letzte Ausgabe).
3. Etymologisches Wörterbuch finn. Spr.
4. neuerfasste Lesebücher für die Elementarschule in Finn.
5. phonetische Landkarte Finne.
6. die Druckeschen über die Bewegung der Sprachreinigung in Finn.

Hochachtungsvoll

I h r

Toyama

画像2 外山高一からラムステッド宛書簡  
(ヘルシンキ大学ラムステッド文庫)



画像1 「分割1」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B06150271300、条約実施、人事 第五巻 (2-3-1-0-41\_005) (外務省外交史料館)